

世界のはじまりの場所で

大村伸一

＊

「これやるよ」

レオナルドの差し出した手のひらは泥で真っ黒だったが他の娘が言うようにそれを汚いと、アミコは思わなかった。とはいえ、手の中には土しか見当たらず、アミコは何を貰えばいいのか分からない。

手のひらからそれを受け取ろうとしないアミコに、レオナルドは少し焦りはじめる。

「こ、これさ、でっかい木になるんだ。兄ちゃんが、これ、植えると三十万年後に花が咲くんだって言ってた」

アミコはそれで手の中に探すべき物が分かり、そうすると種はすぐに見つかった。アミコが不思議そうに自分の手のひらから種を摘み上げるのを見て、レオナルドは少しホッとした。見かけよりもずっと重い種はそらまめほどの大きさですぐになくしてしまいそうに思えた。

「ありがと。うれしい」

アミコは礼を言い、レオナルドの気持ちを傷つけないだろうかと思いながらこう提案した。

「じゃ、一緒にここに植えようよ」

どうせ失くすのなら、二人でしたことにするほうがいい。レオナルドはアミコが「一緒」と言った後は彼女が何を言っているのかまったく分からなくなっていたから、兄を殺せと言われてもうんと答えていただろう。勿論、兄ちゃんを殺すことなんかできない。すごく強いから。

植え付けの儀式はすぐに終わった。あたたかい土をかぶせると、それだけで種は少しふくらんだように見えた。それはとても楽しい時間だったと、二人それぞれが感じていた。頬に土のついたアミコをレオナルドはかわいいと思った。

このようにして種は植えられ、その二十七年後に人類は初めて異星の種族と接触しその直後絶滅する。

＊ ＊

子供部屋の窓からナオミは母と並んで空を見ていた。いつもより小さめの太陽が白く輝く空は昨日までのように青くなく前に見た宇宙の写真のように真っ黒だった。月よりも少し大きめの紫の星とオレンジ色の星が空を見る見る縦に横切ってゆく。昨日は、それに吸い寄せられるように旅客機が軌道を狂わせられ町の中に墜落していった。それ以来、鳥さえも空を飛んでいるところを見なかった。

「朝、来ないね」

ナオミが心配そうにそう言うと、母親はその頭を抱きしめてくれた。小さな声で、大丈夫とささやいていたが、母親も不安なのだとナオミは気がついていていた。

地球防衛軍などという馬鹿げたものが存在することになろうなどと考えたことさえなかったことを、孫量司令官はこの十時間前から忘れていた。二日前、太陽を中心にほぼ地球の軌道の範囲内に、突然、十個の惑星規模の星が現れ、それらすべてが二つから八個の衛星を持っていた。天文学者らの報告によれば、これだけ大量の質量が増加したにもかかわらず元からいた惑星の運行には全く影響をあたえていないという。何が起きているのかは分からなかったが、これが人類あるいは太陽系に対する脅威だということは明らかだった。十時間前司令官に任命されてから、どこにいつ攻撃を加えるべきか。その判断のための情報を探していた。

小さな恒星を中心とする極めて限定されたこの時空間に実体化し始めた旅客星雲の軽量調査星系は、移動の間、対象星系を破壊しないように存在のオクターヴをずらしていた。この軽量調査星系に属する最後の衛星がこの時空に調和し、宇宙が平衡状態に戻った後で、二つの小星雲が衝突するときの光スペクトルパターンを象徴する自らの星雲の名称を、軽量調査星系は規則に従って対象星系に知らせた。

最初の自己紹介で人類の九割が死んだ。つまり、軽量調査星系が自らの星雲の名称を物理領域に物質化したとき、地上のほとんどの地域で爆発またはその虚像が発生し、その爆発で人類の八割が破壊され、虚像によって引き起こされた恐怖のため加えて一割が絶命した。情報系統は最初の爆発で壊滅しており、孫量司令官にその正確な情報が届くことはなかったが、反撃の命令は直ちに下した。第一攻撃隊のキャプテンである宇宙戦闘機のパイロットは名前をレオナルドと言った。彼は二十七年前にアミコに種を渡したレオナルドではなかった。あのレオナルドはその日、故郷の農場でトラクターが故障し車体の下に潜りこんで修理をしていたので、最初の爆発の直撃を避けられ生き延びていた。しかし、それから二十一分後、第一攻撃隊が対宇宙ミサイルを発射した瞬間に絶滅した人類にとって、二人の死の間に何も違いはなかった。

二十一分後ではなく、三十六分後だったかもしれない。分という時間の単位を使用する種族が宇宙から消滅したので、本当のところは分からない。

もしも人類が存在していれば五十二万五千年後と言うだろう時に、人類のなくなった地上には巨大な木が育っていた。人類絶滅の後、地上は汎目的型星雲の渦重管理星団に管理され危険な生物が地球に繁殖しすぎることはなく、木は最も効率的に成長していた。

人でいえば虫歯のような痛みで悩まされ続けてきた木は、その頃ようやく痛みが収まり、暖かい時期になったかのように幹の細胞の成長が緩やかになり、樹皮に虫がうごめいているような感覚を憶えていた。老熟化した樹皮の剥離のために昆虫との仲介を取り持ってくれている花によると、花には虫歯についての古い記憶があり、抜けた歯というものは宇宙の始まりの場所に行って後ろ向きに放ることで、そのかわり幸運が対価として得られるのだと教えてくれた。「虫歯」という概念を木に教えてくれたのもこの花だった。花の言う虫歯の痛みが消えた時期と花が出現した時期は同じだったので、あの花こそが虫歯であり何かよくわからない理由で、自分が虫歯だということを秘密にしているのではないかと木は考えたが、そもそも虫歯が何なのかが分からないのでは考えは先に進まない。花はすぐにそんな考えを忘れた。

さて、後ろ向きにとか幸運とかの意味も全く分からなかったが、花の言葉に促され、木はさっそく宇宙観光協会のビッグバン遺跡観光ツアーに申し込んだ。申し込みは渦重管理星団を通すしかなく、それには時間がかかったので申し込みが完了するまで絶滅した人類の尺度で五千二百年と二日を必要とした。

樹皮に注ぐ熱量が三十五万二十一回増減したあと、ツアーの旅客星雲が迎えに来て、気づかない間に木は旅客星雲の比較的小さい恒星系に属する惑星に収容されていた。三十五万二十一回という回数には間違いはない。木はとりわけ算術が得意で、数字を間違えたこともなければ、これからの未来でも間違えることは一度もないことになっている。

「木だ。本物見るのはじめて」

樹皮に触れる感触からそう話しかけてきたのがかなり大きな質量を持つ岩石だということ

は分かった。

「はじめまして」

木は葉を揺らせてそう挨拶をしてみた。その惑星には話をするのに十分な風がいつでも吹いていた。

岩はこの惑星で生まれた鉱物で、旅客星雲の乗客たちを退屈させないためにツアーに雇われているのだと言った。確かに、生命形態としてかけ離れているように思える植物と鉱物の間で、こんなに自然に話ができるとは木は思ってもいなかった。以前、花と話をしようとしたときも、風の方向や強さのせいでうまく話せなかったものだ。

「この旅客星雲はいたるところ対話が容易になるような物質で満たされているのです。これもツアー社からのサービスです」

と、岩は誇らしそうに言った。

木は虫を集めるために樹皮の内側に蜜を蓄えはじめた。おそらくこれからまた暖かい時期になるのだろう。それでもまだ熟していないから蜜に惹かれて来たはずはないのだが、岩が虫を連れて来たのが分かった。樹皮に触れる虫の身体は軽くて内部は空洞になっているのだと分かる。虫というものはどれも同じで中身がなく、決して信用できない。

岩の紹介によると虫はこの旅客星雲を管理する観光ツアー社の代表だという。

「このたびは我が社のビッグバン遺跡観光ツアーをお選びいただきありがとうございます。快適な旅をお楽しみください」

そして虫は木の根元に何か木の成長を促すものを落として去って行った。

木はとりわけ算術が得意で、数字を間違えたこともなければ、これからの未来でも間違えることは一度もないことになっている。

「ふうん。数ってずっと変わらないの？」

「勿論。変わってしまったら間違えることが可能になり、それは数の定義に反する」

「こわいな」

木には岩のその反応が理解できなかった。何がこわいのかを尋ねると、絶滅した人類であれば千二百五年後というだろう時に、岩は答えた。

「宇宙には変わらないものなどないはずです」

木は枝どころか根までも蠢かせて笑った。

それから、木は岩に数字を教えた。一からはじめて一つずつ、抜けのないようにすべて教えた。

旅客星雲を管理する観光ツアー社の代表だという虫が今度は一匹でやって来た。残念そうに触覚を動かし、樹皮から漏れる蜜を旨そうにすすりながら、虫は話した。

「ご存知のように、観光星雲にご乗星いただくためには、お客様を含めた最小生存環境に同行していただく必要があります。お客様の場合、属しておられた恒星系の渦重管理星団との交渉により、惑星の三分の一に同行が許され、今、お客様のいらっしゃるこの星は、基本的にその惑星の三分の一がベースとなっております。

しかしながら、ご報告するのも心苦しいのですが、この星に生息する小型生物(絶滅した人類の呼び方で「蚊」)が異常に増殖し、我々の星雲に属する他の惑星までをも汚染し始めたのです。多数の星から苦情が届いておりまして、私共も無視することができなくなったという次第です。

このような事態に対して宇宙衛生法では、危険生命体の発生源を星雲から切り離し、破壊するように定めています。我々は法を遵守し、お客様のこの環境を消去させていただかなくてはなりません。

勿論、お客様のご意向も尊重させていただきますので、なんなりとお申し付けください」

木は虫の話を理解するのに絶滅した人類の尺度で五百年かかったが、一旦理解するとすぐさま宇宙弁護士協会に弁護士を派遣するように依頼した。

木は冷たい液体を満たした容器が樹皮に触れるのを感じた。岩によるとそれは水槽で、その中で太く育った海藻がゆれているのだという。

初対面の挨拶の前に海藻の弁護士はすでにすべてを解決していた。

「海から生まれたものは行動が素早いのです」

弁護士はともすれば木に対するあてつけとも捉えられかねないようなことを言ったが、そんな意図はなかったのだろう。海から離れられない生物に、自分の発言を陸の生物がどう受け止めるかなど想像する力もないのだろうと、木は思った。

「ご安心ください。今回の、旅客星雲を管理する観光ツアー社の代表による発言にはまったく根拠がありませんでした。しかも、観光ツアー社がツアー代金を吊り上げようとしてでっち上げた作り話であったことが立証されました。まあ、葉緑素を舐めるな、というところであります(ここで海藻の表面から下品な泡が幾つか浮かんだのだが、木も岩も視覚を持っていなかったもので、それには気づかなかった)。代表は更迭され、お客様の旅行費用は全額ツアー社の負担となり、この旅のすべては無料で遂行されるでいきましょう」

弁護士が引き上げた後、ツアー社の一員でありながら木の友人であるという立場を守り続けている岩の報告によると、今や代表は嚴重に監禁されており、旅客星雲の指揮を取るものは誰もいなくなったのだという。では舵をとるものがない船のようなこの旅客星雲にいて、この星は果たして本当にビッグバン遺跡にたどり着けるのだろうか。木は不安を感じながら、冷えてゆく季節に合わせて地表へと葉を落とした。

「指導者のいない星雲は存在することなど不可能です。この旅客星雲は現在のもとより、そもその始めから永遠の終わりまで、どこにも存在しないことになっています」

岩によれば、旅客星雲を管理する観光ツアー社の新しい代表は薄いゴムの袋でできていてその端を縛った糸の反対の端を表面がギザギザの岩塊が支えているのだと言う。代表に隷属しているようなその岩塊の姿に、絶滅した人類であれば「憤りを覚えている」とでも言うような状態になった岩は、それ以上新しい代表について話したがいなかった。

ゴムとは何かまた袋とは何かを知らなかった木は丁度起った風に枝を震わせて、代表に触れてみた。すると、何か都合の悪いことが起きたらしく、木は空気の激しい振動を樹皮で感じた。代表と呼ばれていたものがその瞬間に消滅したことはすぐに分かった。消滅する前の一瞬の感触で新しい代表の表皮の内側が空っぽだということが木には分かっていた。その表面を構成していたものはただの存在の仮面に過ぎず、内側を満たしていた気体こそが、新代表の本体ではなかったのだろうか。木はそうも思ったが、やはり内部がからっぽであるような虫は信用できないと、改めて確信しただけだった。

自らの存在やその属する世界の存在に確信をもてないような虫に、星雲を導くことなどできはしないはずだ。そういったことを木は考えようとしたが、もはやまったく熱量を感じられない大気と大地に、木の根がほとんど凍りついているため、思考は絶滅した人類の尺度で数百万年ごとにしか生まれなくなっていた。

∞

とはいえ、宇宙があと少しで終わろうという頃、旅客星雲はビッグバン遺跡に漂着した。

ただ、到着しても星雲を離れその遺跡に降りようとする旅行者はゼロだった。ゼロという数字には間違いがあったかもしれない。岩は木に数を教えてもらってきたが、一番難しいから最後にしようと言われて、ゼロはまだ教えてもらっていらなかったからだ。

遺跡といっても、そこには何もなかった。光はすべて逃げ出した後で、重力も質量もましてや時間すら残っていない。そこにあるのは何もない不在の広がりだけだった。

木はすでにほとんどが枯れ、幹には樹肉が萎縮したために空洞が生まれていて、その穴を冷たい風が吹き抜け、わずかの水分が凍りついてできた雪の粉を撒き散らしていた。遺跡と呼ばれる一帯には勿論、抜けた虫歯を投げるような場所も、前も後もありはしなかった。そもそも虫歯とは何なのかが分からなかったのも、出発の時から木は虫歯を持ってきていない。それに木は虫歯のことも自分が何故この場所に旅して来たのかも、すべて思い出せなかったし、思い出そうとすら思わなかった。

ときどき思い出すのは自分が種だったころのことだった。自分のような大きな木に種だった頃があるものだろうかといぶかしみながら、種である自分の上に暖かい土がふわりふわりとかぶせられていた瞬間を思い出す。土をかぶせてくれていたのは何か二つの暖かい存在だった。声が、この種は三十万年後に花を咲かせると言った。だとすれば、その種は結局花をつけることのなかったこの木ではないのだろう。それ以上のことは分からない。それが現実にあったことなのかも分からない。世界が存在するののかも分からない。

なにもない場所を前に、冷たい大気に包まれて縮んでゆく木は、そんな夢をみながら、生命を失っていった。いつも木の側にいた岩は崩れてゆく木の側にうずくまり、結局ゼロについて知ることのできなかったことが残念だと思っていた。

